シリーズ
虹色のひろば

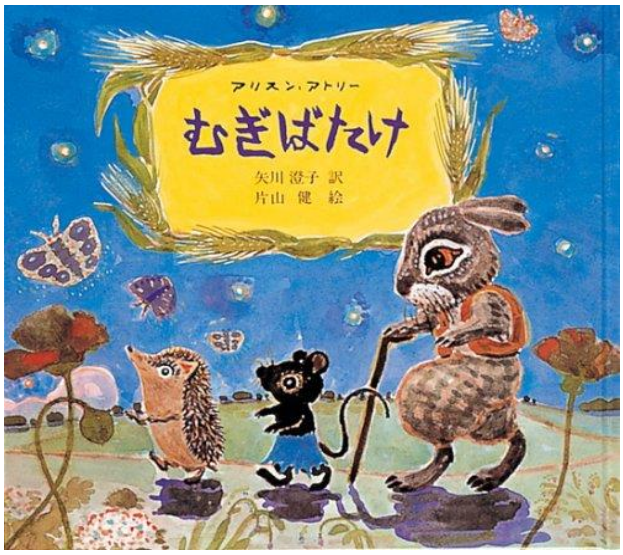
-- 会員の自由な投稿のひろば -

本と子どもたちと由里子さんのこと

小川たつ子（フォーラム会員・日本子どもの本研究会会員）

「むぎばたけ」

梅雨が近づき、車窓の麦畑が少し黄金色を帯び、麦秋の季節を迎える頃、決まって思い出す絵本がある。



アリスン・アトリー作の「むぎばたけ」(福音館書店)。

初夏のかぐわしい月夜の晩に、ハリネズミが草むらの小道を通って、ノウサギやカワネズミといっしょに“ムギののびるとこ”を見に行くお話である。麦の力強く伸びる様に、子どもたちも元気いっぱい伸びていって欲しいという願いを込めて、歌も入っているこの本を私は小学校の図書室で何度も読んだ。まだわずかに残っている近くの麦畑を見に行って、まるで“さざなみ”の様にそよ風に揺れる麦の穂を飽きもせずに眺めていたことも思い出す。

この本は、2005 年、東京の小学校で図書館員（週 2～3 日）として勤務することになった時、当時県立図書館の司書として勤務されていた瀬山由里子さんが推薦してくださった数冊の絵本の中の一冊である。

由里子さんのアドバイス

当時私は高学年の担当を任された(2 人で 1 人分の仕事をした)ので、本の紹介の方法として、興味や好奇心が多様化している高学年には、「読み聞かせ」だけでなく「ブックトーク」という方法もあるという親切なアドバイスもいただいた。その時「文学作品も大切だけれど、多くのジャンル、とりわけ科学の本も必ず紹介してね。」と言われたことをよく覚えている。

「子ども読書年」であった 2000 年に上野に「国際子ども図書館」が開館し、その後読書支援と学習支援を２つの柱に据えた学校図書館の役割が重要視される様になり、それを支える図書館員も多くはパートであるが配属されるようになった。各クラス週 1 時間国語の授業で図書室が割り当てられ、担任の先生の要望に沿って「読み聞かせ」や「紙芝居」「ブックトーク」などを行った。選書をするために、私は時間さえあれば公共図書館に通い本を読んだ。先生方や子どもたちからリクエストされる調べ学習のための参考図書探しも兼ねていた。

「たそがれえきのひとびと」

読書支援では、5年生の子どもたちから、読み終えた時初めて自然な拍手が沸き起こった絵本「たそがれえきのひとびと」(チャールズ・キーピング作)。

たそがれえきに住む年老いた貧しい人々が、皆で買ったサッカーくじが大当たりし、どの様に生活が変わったかというお話。家を買ったり、洋服を揃えたり、ますますお金にとりつかれたり・・・。そんな中でアーネストおじさんの自転車の店は何も変わらなかった。「こどもたちに　こわれたじてんしゃを　しんぴんそっくりに　つくりなおしてあげることが、おじさんのいちばんのしあわせだったのです。」という言葉と自転車に乗って走る子どもたちとおじさんの躍動感あふれる絵に5年生の子どもたちは共感している様に感じた。

私にとっては、子どもたちと一体感を共有したあの時間が忘れられない思い出深い本である。

この本について由里子さんは「評価が真っ二つに分かれている。」と興味深い意見を述べられた。

ナガサキアゲハの発見！…子どもの観察眼はすごい

調べ学習の支援では、3年生がアゲハチョウの観察を理科の学習でしている時、近くの公園でナガサキアゲハによく似たチョウを見つけたので調べて欲しいと担任の先生から依頼された事があった。2005年当時図書館にあるどの百科事典や理科の参考図書を調べても北限は近畿地方のあたりで、東京にいるという確証は得られなかった。今では温暖化の影響で、ナガサキアゲハは東京でも容易に見つけることができるようになり、どの参考図書にもそれは載っているが、子どもたちの観察眼ってすごいなと思った。

学校現場での学びを支え、子どもたちと本をつなぐ仕事の魅力

しばらくして由里子さんは図書館の仕事を辞められ、時折街の中でお会いするだけであったが、常に私は伺いたいことがたくさんあった。夫の士郎先生（注：群馬大学名誉教授。当フォーラムの元共同研究者）と共に長く「山猫文庫」を主宰されていた由里子さんは、経験に裏付けられた子どもたちからの視点を入れて丁寧に応え、いつも「いい仕事だからがんばってね。」と励ましてくださった。学校現場での学びを支え、子どもたちと本をつなぐこの仕事に私はとても魅力を感じ、同業の仲間にも恵まれ、10年近く携わった。

たくさんの本を読み、自分の考えを持ち、鋭く暖かく子どもの本を語ってくださった今は亡き由里子さんともう一度本と子どもたちのお話をしてみたい。